

# 校 友 會 誌

第 四 十 六 號

昭 和 二 十 二 年 一 十 月 一 日 發 行



滋 賀 縣 立 彦 根 東 高 等 學 校

圖 書 館

滋 賀 縣 立 彦 根 中 學 校

校 友 會 誌

第 四 十 六 號

彦根中學校校歌

♩ = 96.



ウミベノハルニ カザラレーテ  
みどりしづけき まなびやーに



クモフキハラフ イブーキヤマー  
ちとくのとぼそ ひらーきつつー



フモトノワカバ アタラシーク  
あけはなれゆく ひとのよーの



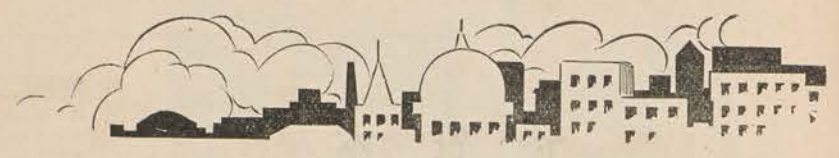
ワレラガソノハ カガヤケリ  
われらがまどに ひかりあり





校友會誌 第四十六號 目次

一、校歌	一八
一、校訓	二〇
一、口繪	二一
第四十九回卒業生	
優勝せる野球部選手	
優勝せる庭球部選手	
講堂用ピアノ、音楽室用ピアノ	
一、卷頭言	學校長 足立芳之助
感謝	
學級増加御禮	
一、彦中健兒に寄す	
一、關ヶ原戰史所見	配屬將校 川崎市助
一、吟詠練習者のために	客員 丸茂義光
一、雪夜に(詩)	客員 森田惠之助
◆研究	
帝國大學水産實驗所見學記	五年 越 武和一〇
一茶の生涯	四年 岩崎 清 一三
内接正七角形の作圖	三年 横田不二夫 一六

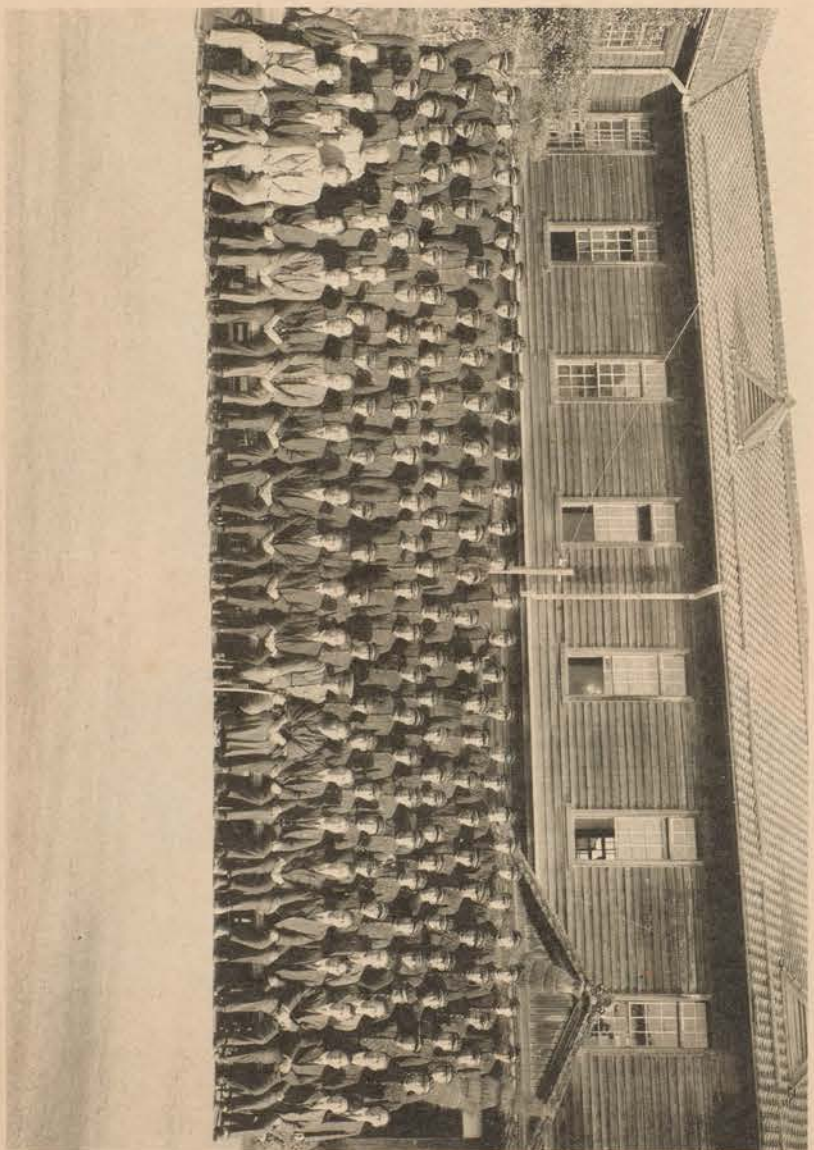


◆文苑	一八
◆詩歌	二〇
◆俳句	二一
一、兵營宿泊記	五年 長谷川千勝 二八
一、縣下中等學校聯合演習記	五年 西島雅彌 三三
一、修學旅行記	第 四 學 年 二四
一、上級學校だより	卒 業 生 三六
特輯	
一、寸言集	第 五 學 年 三八
一、丸山先生を悼む	一五五
一、竹内先生を悼む	一五六
一、ピアノ披露音樂會記	一六一
一、新設庭球コート	一六二
一、校友會運動部々報附應援歌	一六三
劍道部、柔道部、端艇部、野球部、庭球部、競技部、水泳部	一六五
一、雜錄	
學校日誌抄	二六
校友會役員	二六
校友會會計	二九
一、編輯後記	三三
	五年 青山正彦 三三



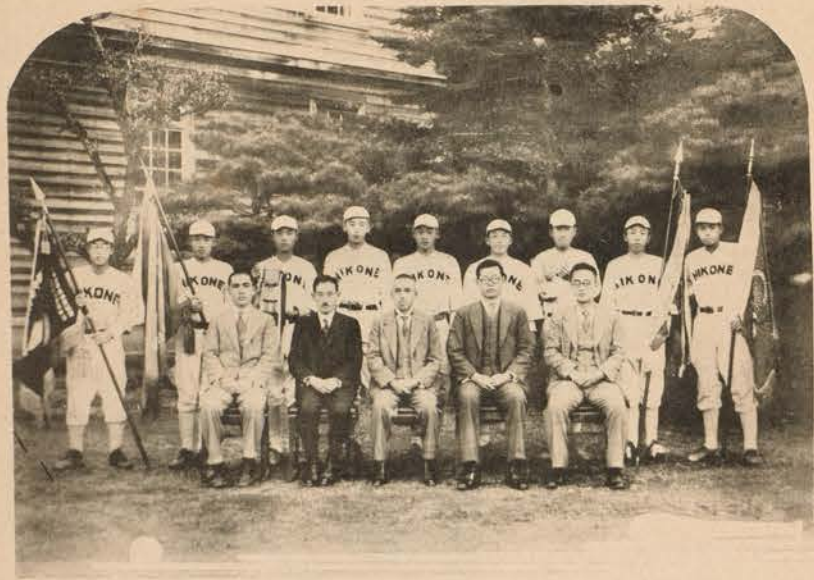
校訓

本校生徒ハ 聖旨ヲ奉體シ 敬神崇祖  
質實剛健 勤勉力行 和衷一心 以テ  
至誠奉公ノ國士タルベシ



生業卒回九十四第





優勝せる野球部選手



優勝せる庭球部選手





ノアビ付備宝歌樂管



ノアビ付備堂講



## 昭和十二年の新春を迎へて

學校長 足立芳之助

昭和十二年の新春を迎へるに際し、謹みて 聖上陛下の萬歳を壽ぎ奉り、皇太子殿下を始め奉り皇族の御方々の益々御健勝にわたらせられんことを御祈り申上げ我が皇國の愈々隆昌なることを冀ふものである。

昨昭和十一年は誠に多事多難の年であつた。今年は何如。之を國外に見る。東亞並に歐洲の天地は共に不安は去つてはゐない。加ふるに本年は海軍々備無條約の第一年だ。非常時はこれからだ、の感がする。之を國內に見る。三十億圓を超える帝國未曾有の巨額の財政は、そも何を物語つてゐるか。思ひ來れば、今年は實に容易ならぬ年、昨年にも増した多事多難が豫想されるが、之は飛躍の爲には不可避の代價だ。我が皇國民は、今年こそは萬難を排して舉國一致、最善を效して皇國の一大飛躍を畫し、以て彌々益々國光を宇内に輝かさなくてはならぬ。

次に本校に就いていふ。今年は五月一日を以て本校創立五十周年を迎へる洵に慶祝すべき年である。五十年といへば正に半世紀の長きに及ぶが、本校の創立は正確にいへば六十一年の昔であり、更に其の前身たる藩校をも通算すれば、悠々百四十年の昔となる。然も其の間 畏くも大本營に御治定相成り、實に六日間の久しきに亘つて 大正天皇御假泊の御恩澤に浴し奉つた光輝ある歴史を有つてゐるのである。我等が今日傳統的彦中精神の裡に樂しき學園生活の出来るのは、全くこの尊き歴史の賜であつて、今更ながら感謝に勝へない次第である。同時に我等は現實の價值發揮によつてこの悠久なる歴史の意義を最大限に發揮する責務がある。然り、彦中今日の活動を決するものは五十年の歴史であり、彦中五十年の歴史を活かすものは我等今日の活動である。我等日々夕の努力によつて我が彦中を最善最美の學校たらしめること、之ぞ創立五十周年記念日を迎へる我等第一の準備でなくてはならぬ。

今年こそは相携へて一段と眞劍の精進を效し、以て至誠奉公の國士たるの實を擧げんことを誓つて、年頭の辭とする。



## 感謝

學校長 足立芳之助

昭和十一年五月五日、西田庄助氏より講堂用として山葉平ピアノ一臺、石橋彦三郎氏、前川善市郎氏、奥村龜太郎氏、古川銀次郎氏、宮部千太郎氏より音楽教室用として山葉平ピアノ一臺、共に至極立派なものを御寄贈に預かり、本校音楽教育上に一新紀元を劃することとなりました。誠に感謝に勝へないところであります。茲に滿腔の誠意を披瀝して深甚なる謝意を表する次第であります

## 學級増加に就き御禮

昭和十一年十二月十五日、本縣々會に於て本校學級増加の議決を得ましたことは、本校教育の上に慶福に堪へない次第であります。之を以て本校は定員一千名となり昭和十二年度より第一學年生徒二百名を募集し之を四學級に編成することを得、本校教育上一新紀元を劃することとなります。誠に感謝に勝へないのであります。今後益々本校所在の歴史性に鑑み、本校使命の自覺を深め、奮勵努力以てその實質の向上發展に盡したいと思ひます。茲に縣當局、縣會議員各位、並に彦根町當局、町會議員、本校同窓會幹事の方々に對し誌上を以て滿腔の誠意を披瀝して深甚なる謝意を表する次第であります。

滋賀縣立彦根中學校長 足立芳之助



將に記念すべき創立五十周年を迎へんとして、之に先立ちて學級は増加され、生徒定員は一躍一〇〇人と改まる。地元彦根は新しく市制を施いて同じく當來の膨脹と繁榮とを約束する。膨脹彦中、躍進彦根。正に南郊北郭春花一時に開くの盛運は到れり。この際、この時、

### 自重せよ。わが友、彦中健兒。

歴史の古き。歴史の尊き。不拔の傳統。先輩の俊英。かくて有機的に相結ぶ一途直往の姿勢。あゝわれらが學園。あゝ譽ある幾春秋。この際、この時。

### 自敬せよ。わが友、彦中健兒。

人は社會に於てのみ人となる——優秀なる個性の種子は優秀なる環境の肥料に恵まれてこゝに美果を結ぶ。知れ、光榮の絶大は同時に責任の絶大であることを。この幸慶はこの機會に於て利刀を試せとの新しき課題を加へる。わが彦中正念の發動は今後にあり。此の際、此の時、

### 勇氣あれ。わが友、彦中健兒。

歴史は無聲の偉人の威力。先輩の英圖は即ち我等の個性。至誠奉公は實に我我一貫の主張。かくて、時の情感は、強き生命力となつて彦中の彦中たるところを大活自現せん。努めよ。わが友。

### 沿革

寛政十一年	稽古館 (彦根藩)
天保元年	弘道館 (ク)
明治二年	文武館 (ク)
明治三年	學館 (ク)
明治三年	藩立彦根中學校
明治九年	彦根學校
明治十年	彦根傳習學校
明治十二年	彦根初等師範學校
明治十三年	(縣立) 彦根中學校
明治十三年	(町立) 彦根中學校
明治二十年	滋賀縣尋常中學校
明治三十一年	滋賀縣第一尋常中學校
明治三十二年	滋賀縣第一中學校
明治三十四年	滋賀縣々立第一中學校
明治四十二年	滋賀縣立彦根中學校

## 關ヶ原戰史所見



配屬將校 川崎市助

『第九師管内古戰史集録より』關ヶ原戰史所見を抜萃して校友會誌に寄す。

一、關ヶ原の戰役は實に豊徳兩派争覇の一大決戦にして戰鬪參加兵力の衆多なる戰果影響の廣汎なる我國戰史中多く其類を見ず。然るに一日戰鬪の開始せらるゝや僅々半日にして戰局を結び、西軍一敗地に塗れて又起つ能はざるに至る、其因由擧げて數ふべきもの多しと雖も先づ西軍統帥指揮の不統一に歸せざるべからず。蓋し西軍の師を興すや主として三、四策士の奔走に成り鳥合の軍を驅りて戰場に臨み全軍を統帥すべき最高級指揮官を缺く。

當時西軍中門地と兵數を以てすれば秀家第一たり、然れども秀元、秀秋二人之と頡抗して相下らず軍事老練なると士馬の強銳なるとを以て云へば惟新なり、然れども此時率ゐる所の兵數甚だ寡し又此役の首謀は三成にして其與に協心謀議せしは吉繼なり、然れども何れも參謀の地位に在り將帥たるの德望なし。輝元を大阪より迎へて統帥たらしめんと欲せしも遂に到らず爲に軍に頭首なく軍令一徹せず、各將互に相危疑して衆心安からず此軍を以て精銳の東軍に對せんとす、危からざるを得んや。

東軍は之に反し首將家康は攻城野戰に長じて且重望を負ふ、將士麾下に離伏して同心協力するの狀は黒田、福島等新屬の客將が競ふて忠勤を勵むの狀を見ても知るべく毛利、小早川等の輩が疑を通じ和を講ずるの狀を見ても察すべし。關ヶ原決戦の前夕家康間諜を放ちて敵情を搜らしむ、報告あり西軍の兵力十萬なりと獨り黒田の士某稱して二萬許りと云ふ、之を詰問すれば則ち曰く誠は總計十萬を超ゆべし、然れども山嶺布陣の敵は平地の戰鬪に参加し難し況んや勝敗を觀望する者多し今稱して二萬と云ふは眞の圖志ある兵數なりと、家康其言を嘆す。即當時東軍の士氣旺盛にして一下士と雖も亦戰勝を疑はざりしの状態ふべし、之を衆心不安互に相狐疑して戰に臨む者に比すれば勝敗の機運戰はずして既に決しありしの感無くんばあらず。



二、亂世内地の争戦に在りては主將は單に攻城野戰に卓抜なるのみならず恒に天下人心の趨嚮を洞察し此間に處して自黨自軍の勢威を近遠に擴張することに特に留意するの要あり、家康が東西兩軍の既に各攻勢を取りて尾濃の野に相近づくに當り、依然江戸城にありて動かざりしは以て新屬諸客將の行動を試察するにありしと雖主として此間運籌劃策遠近諸將と好款を結び東軍の權勢を扶植擴張するに寧日無かりしを見る、決戰に當り東軍に内應して反撃せし者多かりしも亦實に豫め家康の劃策せし所たり、故に關ヶ原の勝敗を論ずるに單に戰鬪行爲のみを基礎として之を批判するは早計と謂はざるべからず。

三、然れども亦戰略戰術上に於て西軍に幾多の過誤なしとせず。

八月二十二日東軍木曾川を渡りて織田軍を攻撃するや當時三成は小西、島津と共に空しく兵を長良川以西に擁して傍觀し敵をして各個擊破の機會を得せしめたり。

翌二十三日には宇氣多の精兵一萬騎新に大垣に到着するあり、當時秀家の意見を容れ斷然木曾川右岸の東軍に對し攻勢に轉ぜんか逸以て勞を撃つ勝算なきにあらざりしなり、然るに三成の斷亦茲に出でず敵兵進みて赤坂に陣し大垣に對して側背を暴露す、尋て九月四日乃至七日の間に於て西軍には毛利、吉川、長束等の兵三萬到來するあり。兵力激増頗る優勢、東軍の三萬に對し西軍の五萬二千となり大垣及南宮山兩方面より赤坂附近孤獨の敵を夾撃し得るの形勢にあり三成此の有利の時機に投じ家康の來るに先ち一舉攻勢に轉ぜんか敵を各個に擊破すること望み難きにあらざりしなり。然るに三成の斷茲に出でず家康來るに及びて西軍の士氣頓に沮喪動搖するに至る。九月十四日東軍大垣を捨て、西進するの報あり當時島津惟新敵の警戒嚴ならざるを見て夜襲を主張す、是又攻勢の一好機たりしならん而して西軍最後の攻勢は實に此機を措いて他に無かりしなり。然るに三成の斷亦茲に出でず。

三成敵の赤坂を發して西行すると聞くや即夜倉律として關ヶ原に轉陣す。其行動敵の意圖に追從するものにして既に一籌を敵に輸す而して三成の意關ヶ原に於て決戰をなさんとするにありしが如しと雖暗夜未知の生地に至り殆ん餘餘なき時間を以て設備なき陣地に依り志氣兵力共に優勢なる敵の攻撃に對せんとす甚だ危険の策と謂はざるべからず、況んや陣地の傍側に大兵を擁して蟠居する秀秋の軍は既に二心の疑あるを知られる當時に於てをや。

四、東軍の先頭兵團木曾川を踏えて赤坂に布陣せしは無謀なり幸に西軍攻勢に出でざりしを以て大過無きを得たりと謂ふべし家康來りし後陽動宣傳を以て西軍を大垣塞より關ヶ原平野に誘致したるは老巧の手腕と謂ふべし。

家康南宮山を側背にして深く關ヶ原の盆地に進入せるは戰術上甚だ無謀の行爲なりと雖既に西軍の内應を知れる當時の狀況としては寧ろ行動の敢爲を以て決戰を誘致したる好適の決斷と謂ふべし。

五、關ヶ原に於ける西軍の布陣は暗夜匆忙の際殊に不統一の指揮の下に實施せられたるものとしては甚だ見るべきものあり當時若し秀秋の攻撃なかりせば勝敗必らずしも斷言し得ざるものあり。戰鬪力に於て西軍の必ずしも東軍に比し劣らざりしを證すべし。秀秋等の反撃は實に西軍の爲千秋の恨事と云ふべし。

六、秀秋不信不義の戰鬪をなし友軍を撃ち同志を屠り其非武士的行爲に憤死せる吉繼等の餘憤は三百年後の今日に及び當時の戰史を研究し戰跡を探討するものとして切齒扼腕せしむ。一時の榮福を希ひて名を汚し節を折り醜を竹帛に垂る其行爲寔に憐むに堪へたり。

毛利秀元宗家の祀を絶たざらんがために東軍に内應し戰鬪に参加せざりしと雖其後戒心して大阪に急行して宗主輝元に勧めて大阪城に據り東軍に抗せしむ。其意蓋し家康の誠意を疑ひ寧ろ嗣君を擁し堅城に據り以て有利なる講話條件と結ばんとせしなり。

然るに輝元東軍の甘言を信じ城を退きて群山に籠り遂に家康の爲めに備中、備後、安藝、伯耆、出雲、石見、隱岐の七州を削られ僅かに周防、長門の二州を得幾許もなく薙髮す。是又意志牢固たらざる主將の招ける禍害深く殷鑑とすべし。

七、秀秋、秀元の非武士的なりしに對し嗟嘆措く能はざるは大谷吉繼なり、島津惟新父子なり。吉繼は始め徳川の命に應じ東下せんと欲し兵二千餘を率ひて發す。三成途に之を佐和山に迎へ家康討滅の企圖を密謀す吉繼之を非として曰く内府今日の威力誰か敢て之に敵せん且足下は清正以下諸將に憎まる久し今事を擧げんか彼等皆内府に集し讐敵とならん。大關殿下拮据數十年干戈纒に戦り萬民將に安堵せんとするに今復之を動かすは豈天理に逆ふにあらずや僕病

羸の身を以て猶東下せんと欲するは徳川、上杉二氏の間居り調停せんと欲するのみ足下幸に熱慮せよと三成曰く僕の此舉は一に豊臣氏の爲に謀るなり一身の爲にあらず、吾心既に決せり且曾て直江と約し上杉をして事を起さしむ。今に至りて變心すること能はずと再三竟に聽かず此に至り吉繼乃ち意を決して曰く彼既に密謀を吾に告ぐ吾其事の成らざるを知ると雖之を棄つるは不義なり唯當に一死を共にすべきなりと、是より三成と同心協力終に關ヶ原に陣亡す。信義を重んずる吉繼の如きは亦稀世の士と謂ふべし。



島津惟新父子に至りては則ち戦國時代快男子の典型なり。大和武士の儀表なり。勇邁の氣象剛強の意志難境に處して毫も感はず恒に名節を惜み信義を重んず。其忠肝義膽千軍萬馬の中を驅走するの風貌は北越謙信の英風と並び懸けて武將の双璧と爲すべし。

八、之を要するに關ヶ原の戦鬪は昔日の所謂大決戦なるも吾人に垂る、教訓は必ずしも豊富ならず然れども亦吾人の心膽を練磨し士道を研礪するの殷鑑龜鑑の少からざるを見る。

## 吟詠練習者のために

客員 丸 茂 義 光

時局益々多難となり、正に有史以來の大國難に直面致せる今日に於ては、特に世の中堅たる君等青年の志氣を旺盛ならしむることが最大急務なりと信じてゐる。此に於て、止むに止まれぬ至情に依り、獨り青年と語り、青年と交り、青年の意氣に觸れ、青年の氣持に生き共に精進を重ねつゝ今日に至つたのであるが、昨今動もすると、世の青年に志氣の旺盛を欠くが如く見受くるものあるは、誠に遺憾至極である。

然るに、近時輕佻浮薄な歌曲の氾濫に抗して、興國的な詩吟熱が鬱勃として、擡頭して來たことは、精神作興の意味において、眞に喜ばしい現象があると痛感してゐるので、以下詩吟に對する日頃の考の一端と之に對する吟法等につきて少しく述べてみたい。

勿論獨自の考へ方であり、卑見てもあるので、吟法等も他の人達と違つた点多々あると思ふのであるが、其處に又詩吟としての特色が存するのである。

君等の教科書中には、隨所に漢詩が挿入されてゐるが此の詩をたゞ單に解釋のみに依つて、詩中の人となり又作者の心境に入る事は極めて六つかしいと考へるのである、例へ拙くとも氣品の高い、氣力のある吟法に依つて、朗吟して見給へ、

眞に特殊の興味も湧き、漢詩の鑑賞にも益するところ多く、精神的の鍛錬は勿論のこと、言ひ知れぬ感に打たれるであらう。

「居は氣を移し、養は体を移す」とは眞に明言である。四圍の環境に依つて人間の性格舉措は如何様にも變轉するのである。舊い言葉であるが、「水は方圓の器に従ふ」況んや人間は感情に生き集りて共同生活を營む限り、常時の見聞は何時となく感染するものである。殊に青年期は感受性の最も熾烈なる時期であるから、暫く同一環境が繼續すると全く習性となり、第二の天性ともなると思ふ。先覺の士が常に青年の教養を叫ぶのは、蓋し青年をしてよりよき、環境に終始せしめ、次代の國家負擔に強き力を養はしめんとするに外ならないと思ふ。

我等は口を開けば大和魂を誇る。此日本魂は誠に世界何れの國にも見ぬ我が國獨特の犠牲奉公の大精神であるに相違ないが此の精神涵養は一朝一夕に出來たものでは決してない、我國の歴史中、國體觀よりすれば忘はしき時代ではあつたが武門政權の七百年間に於て所謂武士道精神の向上は見逸し得ぬ考察である。北條時宗が斷として元に抗し、續いて大楠公の忠誠を生み足利氏の末世は戦國時代となり、群雄互に武を練り、兵を養ふを事とし、義に勇む猛心は培はれた。織田、豊臣を経て、徳川氏が天下を平定したものの、全國各大名は互ひに國境を争ひ、士道教育に寸時の倦怠も許さなかつた、此時武士の子弟教養は實に峻烈なものであつた。見よ幕末に現はれた會津藩白虎隊の壯烈を！ 彼等は常に外敵を假想して緊張そのものが環境に於て育てられたのであつた。

更らに薩摩藩十八健兒社を見よ。北境肥後の加藤藩と相競ひ常に、北敵を睨んで起臥してゐた。當時の歌謠に曰く

肥後の加藤が來るならば、煙硝（火藥）肴に

團子（彈丸）玉。會釋團子は何團子鉛團子のくし團子。

それでも聞かずに來るならば首に及の引出物。

何と物凄い俚諺であらう。此俚諺は更に、一世の文豪、頼山陽先生に依つて詩化されたのがあの有名な衣は袖に至り。袖腕に至る。の詩である。

衣、至<sup>レ</sup>袖、袖、至<sup>レ</sup>腕

腰間、秋、水、鐵、可、斷







遺恨ナリ、逸ス、一劍のところは力を特に入れること、此の詩なきは殊に詩中の人となり、作者の氣持になり得て始めて吟ぜられる詩である。

(三) 大楠公

豹ハ死シテ留レ皮ヲ豈偶然ナラシキ  
人生有リ限リ名ハ無シ盡ケル

梁川星巖作  
湊川遺跡水天ニ連  
楠公精忠萬古ニ傳

此の詩は起句より、強吟に入る所に大なる特色があるのであつて、『豹ハ死シテ皮ヲ留ム』までは同一調子で強く吟ずるのである。

(四) 國體篇

岩崎行親作

邈今二千六百秋  
國體之優風土之美  
豐葦原之瑞穗國ハ  
行兮爾就而治レシ之  
神訓炳乎如日星  
三種神器教の君道  
我皇神孫無ニ姓氏  
億兆齊仰グ一家ノ君  
欲スル孝ナラント親者須忠ナラント君ニ  
忠孝一致君國一ナリ  
嗚呼美哉日東君子國  
嗚呼優哉萬世一系君  
國體篇は言ふまでもなく、我が國體の精華を謳うたのであるから、之を吟ずるに當つては、一言一句、莊嚴慎重に吟じ、聽く

者をして、自から襟を正さしめる様にならなくてはならぬ。尙吟法について氣品、氣力、意氣、明瞭、豪壯、勁健等を言ひた

雪夜に

客員 森田惠之助

狐なくなら  
遠野でなきやれ

里ぢや  
夜更けが  
こわくなる

憎火もやして  
お嘶しきいた

春戸を  
ことりと  
風が鳴る

何か來るよな  
茅野の雪を  
そつと  
てらした  
青い月。





# 研究

## 東京帝國大學農學部附屬水産實驗所 新舞子水族館見學之記

五年 越 武 和

白砂に映ゆる常磐の松が、磯馴れのハーブを奏てる新舞子海岸に在る、當水族館は東大附屬として權威ある學者と、凡ゆる近代科學の粹と、最高水準の設備とを得た『現代ニッポン』の誇り得る、世界屈指の大海族館であり、又近代龍宮の殿堂である。着工昭和拾壹年壹月貳拾日、竣工昭和十年六月下旬、開館式昭和十年七月二十三日、總經費十萬圓、位置名古屋郊外新舞子海岸、名鐵電車常滑線新舞子驛下車、神宮前より四十分、五十六錢、敷地面積一、一七九坪、建築面積三三三坪、鐵骨鐵筋コンクリート造、近世式魚槽は鹹水魚槽四十九、淡水槽十二、發光魚槽三、豫備槽八、他に熱帶魚特別室一、大放亀槽一、小バット三十三、屋外大鹹水池一といふ

状況である。

特徴としては紺碧の海底を思はしむる爲、觀覽室の天井は紫雲ヘリオトロップ極彩色、床は青緑のタイルを敷き、壁は淡黄色、魚槽内流水は世界最初の循環式を採り、電動力に依り一分間に二米の速度を以て循環せしめ、電熱温水装置に依つて嚴冬と雖も、魚類に必要な温度を保持する。魚槽内等岩石は全國各地より奇石怪石を蒐集し、魚類の種類多きことは世界無比である。

淡水魚が二十餘種、鹹水魚が百種に近く、熱帶魚が數十種、世界の各地を網羅してゐる。一々列擧する邊もないから此の魚類中の特殊のもの、みにつき産地、習性を淡水、鹽水、熱帶魚の順に記する事にします。これは當水族館の調査に依るものであります。

(イ)、カムルチー(黑魚) *Ophiocephalus argus*  
タイワンドゼウ科 朝鮮原産の魚で滿洲、支那にも棲息す

る。一般には臺灣泥鰌と云はれ、朝鮮では黒色(カムルチー)、臺灣では(ライヒー)と稱してゐる。

繁殖力強く、強健である爲、何處にてもよく繁殖する。晝間は物影にかくれて静かにしてゐるが夜に入ると活動し、小魚を捕へて食す。特にフナを全滅させる恐がある爲、内地では余り養殖されません。朝鮮、臺灣では食用に珍重されてゐるとの事です。

(ロ)、ソロー(草魚) *Tenopharyngodon idellus*

臺灣が原産で、本種は動物性餌料を攝らず、水中に生ずる藻類を食する爲此の名があります。生長は比較的早く二寸位の稚魚は一ヶ月にして二尺大一貫目位に達するので、養魚家としては非常に好都合で、臺灣に於ては淡水養殖の重要魚とされてゐます。味は鯉に似てゐるが幾分淡白と云はれてゐます。

(ハ)、おやにらみ(親鮠) *Bryttosus kawamehurti*

はた科 淡水魚中南部の代表種で山陽、山陰、香川縣、九州、朝鮮に産し、小さい川魚で、稍々上流に棲み、体長は五寸を越える事はありません。

褐色の地色へ赤色の線を持って美しく、食料としての價値はないが、小兒遊漁の人気者である。

(ニ)、かわはぎ(皮刺) *Monacanthus scirrhifer*

かわはぎ科 本州中部以南の各地沿岸、朝鮮南部、東支那

海等にも棲息する。皮を剥いて料理をする爲に、カワハギハゲ又はハギ等の各稱があります。

活動遲鈍で、遊泳力に乏しく、平時は垂直鰭を波狀に動かして前進又は後退します。

斑紋は生長するに従ひ色濃く且小形となる。夏季美味で殊に肝臟は佳良である。

(ホ)、とらふぐ(虎河豚) *Phaeocephalus rubripes*

まぶぐ科 本州中部より南に至るに従つて多く棲息する。

ふぐ類は一般に卵巣及血液等に『テトロドトキシシ』と稱する毒素が含まれて居り、其の爲に食用として危険視されてゐるが、之は調理の方法に依りて除かれる。

あの有名な下關の河豚料理は主として本種が用ひられ、關東方面に於ては河豚提燈の材料に用ひられる。

(ヘ)、ねこざめ(猫鮫) *Heterodontus japonicus*

ねこざめ科 暗海性のもので、東京以南の太平洋沿岸に相當多く、我國現存鮫類中では原始的のものとされてゐる。

海底に棲息し、通動不活潑である。齒は頗る強くサッエを好み、貝を碎き破片を水と共に鰓孔より排出する。

惣菜用又は蒲鉾原料となる。

(ト)、とびえい *Myliobatus tobijei*

とびえい科 トビエイの名稱は形が鳶に似てゐる爲であるとも云ふし、又水面を跳ぶからとも言はれてゐる。



胎生で胎兒数は八尾位である、食用にもされるが余り美味でないさうです。

(チ) こばんぢめ (小判鮫) *Septecheilus naucrates*

こばんぢめ科 頭頂に小判形の吸盤を持ち、鮫、鯨、船舶等に吸付いて移動する。余り食用には供されませぬ。

(リ) うつぼ *Gymnothorax kiriko*

うつぼ科 本州中部以南に廣く分布し、沿岸の岩礁の間に棲息する。性狂暴で、色々の水産動物を貪食し、殊にタコ類を好んで襲ふ習性がある。之に噛まれると疼痛が著しいさうです。皮膚は肥厚し弾性が強い爲に韃皮となし、婦人の裝飾品の材料とされます。肉は余り美味ではありません。

(ヌ) ごんずい (權瑞) *Plotosus anguillaris*

ごんずい科 熱帯性のもので紅海、印度洋に饒係し、本邦中部以南にも多く、淺海に常に群をなして棲息し、互に同一動作をします。背鰭及胸鰭棘直立させて摩擦音を發する此等の棘の兩側には毒腺があり、之に螫されると激痛を感じます。食用とする地方もあるさうですが、價値は殆んどありません。

(ル) きゆうせん (求仙) *Halihoeres poecilopterus*

べら科 雌は青味が強く、雌は赤味がかゝつてゐる。暖海の砂地に棲み、夜間は砂中に潜り、体全體をかくして寝る習性がある。

龜程多くはなく、且つ北方へ來る事は稀である。

正覺坊とも稱せられる。背甲は暗青色、主鱗板は十三である。肉は美味で、甲は赤海亀と同様に利用される。

(タ) 闘魚 (*Fighting fish*) *Betta splendens*

トウユウ科 暹羅國の産で、非常に喧嘩好きで、闘争するので闘魚の名稱があります。

体色は常に赤黒く、求愛期は赤色を増して美しくなる。全鰭を擴げて盛に雌に對して示威運動を試ると言ふ事である

(レ) シューウエルフイツシユ (寶石魚) *Hemichromis bimaculatus*

キクラ科 熱帯魚中最も美しい種類の一つである。雄は腹部から赤色にボカされ、小さい金屬性の光澤ある青

い斑紋は全身を蔽ひ、極彩色の鮮麗眼を奪ふものがある。

仔魚は親の脇側を離れることなく、群をなして遊泳する愛情は他の種に見る事の出來ない圖であります。

(ソ) エンゼルフイツシユ (天使魚) *Pterophyllum scalare*

キクラ科 迎も原始的な怪奇さは、熱帯魚中の第一位であつて、養魚家には知らない者が無い程有名なものです。

全体銀色に大膽な生々とした黒の太い縦縞を現はした、華麗ではないが貴族的な威容と尊嚴とを兼備し、王者の如き堂々たる風姿はそのエンゼルの貴録を示すに充分である。尙館長は農學博士雨宮青作氏、水族館主任は理學士片田慶三氏である。

我國では極めて普通のもので、且べら類中最も美味なもの

(オ) かんだひ (寒鯛) *Semicossyphus reticulatus*

臺灣より南日本にかけて分布する。雄は額部が頗る突出し瘤の様なのでコブダヒとも稱せられてゐる。幼魚の時は瘤はなく、体側中央に白色の一線があつて、成長するに従つて消滅する。比較的美味な魚です。

(ワ) たつのおとしこ (龍の落子) *Hippocampus coronatus*

本邦各地の内灣の海藻中に極めて多く棲息する。平時は海藻に尾を卷付けて直立してゐるが、泳ぐ時は体を垂直にして、尾を内側に巻き背鰭で泳ぐ。雄の腹部に育兒囊があり孵化するまで保護する奇習があります。

(カ) あかうみがめ (赤海亀)

うみがめ科 熱海地方より、北は北海道まで廣く分布する最も普通に見られる亀で、背甲の色は暗褐色、主鱗板は十五である。初夏の候に砂濱上來て數十個乃至百數十個を産卵し砂濱中に埋没し、自然に孵化される。

海草等に柔いミル等を食用とするが、又好んでタコ、サメ、エ等を餌とする。肉は臭氣を有し、食用には供されず、甲は薄く光澤がなく、良質ではないが、俗に和甲と稱して錨甲細工に混用される。

(コ) あをうみがめ (青海亀) *Chelonia japonica*

うみがめ科 熱帯地方より本邦近海まで分布するが、赤海

一普通の物と重複しては居ないかと危懼の念を抱けてあらうが、事實本館各方面悉く新しく見る所て、如何に魚類通と雖、必ず此所に何か新知識を得るに違ひありません。唯單に見學するだけでも敢て徒事ならずせう。

次に一回入場料小人十錢、大人十五錢です。入場の資格者は幼児には保護者附添、酔漢は勿論水泳着のみ、等風俗を害する者は入場を嚴禁されてゐます。又一般の無斷寫眞撮影は禁じられて居ます。

此の地は、近年海水浴場として名高く、キャンプ生活者にも便宜を計られて居りますから、一度は見學しておく可き充分の價値あるものである。

## 一茶の生涯

四年 岩崎 清

(一)

一茶が呱呱の聲を上げたのは、丁度寶曆十三年の事で、出生地は信濃の最北端柏原である。一茶の魂はこゝで育てられ、文政十年の秋半ばにこゝでまた亡くなつたのである。

冬枯や隣といふのも越後山。

信越國境にまたがった妙高山の、山峽の一寸した高原地、そこには點々と部落が散つてゐる。その中の一部落、柏原の地



一体は眞黒い腐殖土で蕎麥の栽培には好適地であつた。

信濃では月と佛とをらが蕎麥。

と一茶は詠んでゐるが、實際姥捨山の月と、更科の蕎麥と、善光寺の生佛とは天下の著名であつた。夕日が黒姫山の邊に姿を没すると彼の母は一茶を抱いて家路に急ぐのであつたらう。家では祖母が夕飯の準備に専心してゐるし一家には貧しいながらも楽しい夕の一時が訪れてゐたのだつた。

しかし神は何時までもこの幸福を恵まなかつた。彼が僅三歳の秋、母は一茶を残してあの世に旅出つて了つたのである。それからと言ふものは刺々しい浮世の波が幼い一茶の心を傷けて行つた。

母の死後、近所の子供と楽しく遊んでゐても一茶の心は冷たい石を抱いてゐる様な、やる瀬ない寂寥に對して堪へず熱い涙に浸つてゐた。一茶は次第に人々を憎む様になつた。そして少年の遊びたい心を押へて、獨りて裏庭で遊んでゐた。此の時小さい羽音を立て、下枝に遊ぶ小雀の愛らしい姿は、六歳の一茶のまはらぬ舌に

我と來て遊べや親のない雀。

と口吟せたのである。

この無造作な、たゞ云はないではゐられぬといふ事を云ふ氣持が、彼の死ぬまで俳句を詠みつづけた心持である。彼にあつては俳句は或る時は『悲しい玩具』であつたらうし

或る時は彼の『偽らざる獨言』でもあつた。

(二)

さて一茶の繼母が來たのは八才の時である。この母が來てからは彼は終日、繼母の機嫌を取らねばならなかつた。

ま、つ子や涼み仕事に業た、く。

一茶の當時の心境は此の一句に盡きてゐる。

而もそれが異母弟仙六が生れてからは、繼母の心は益々彼を邪慳にした。朝早く草かりに行く村人が菩提寺の明恵寺の縁下に夏の蚊に攻められて、それでも頑足なく寝入つてゐる一茶を見ることが屢々あつた。

故郷は蠅まで人をさしにけり。

これは當時を追懐した句ではなからうか。おぎ／＼した少年の心。一茶はかうして淺間しくも人の機嫌を取らねばならぬことを覺えさせられたのだつた。

しかし彼の父も

おさらばぞ仲よく致せ門涼み。

の辭世まで残した人である。人の心の悲しみ淋しみは痛切に推察してゐた。

(三)

安永五年夏半ば、祖母は六十六才を一期として失くなつた。少年としての明るさのない闇の心には、祖母の死に一層憂愁を培はせた。一家の風波は益々荒れて行く。

父も一茶の將來には色々考へさせられた。そして遂に一茶を江戸修業に旅立たせたのであつた。『毒なものは食ふな、人に悪く言はれるな。』これらの言葉は眞の親の肺腑から出る恩愛の心からである。一茶は心の底から泣けたであらう。

思ふまじ見まじとすれき我が家かな。

かくて十四才の少年は江戸へ上つたのである。何の目的で、又何處へ—これらは知る由もないがその時分に作つたであらう俳句から想像するだけの事である。

馬までも萌黄の蚊屋にねたりけり

とあるのを見れば、武家屋敷に奉公してゐたか。又谷中の本行寺にもゐたらしい。が聖堂と題して

辰のならね所から梅の花。

の句からは一茶が聖堂に住込み、苦學に努めしかとも思はれる。孰れにせよ以上一茶が江戸に於ける、それらの種々相は皆それを肯定し得る。そして當時の消息が詳でないだけ彼の苦心が偲ばれるのである。

(四)

一定の住所もなく放浪生活に没頭してゐた一茶は突然、故郷を出てから十一年の後、二六庵に於て後世連頭の秘書と尊ばれた白砂人集を、圪橋といふ號て手寫せる事から又世に現はれて來た。一茶はこの時は二十五歳の秋であつたらしい。

一茶は幼時から苦勞して來た。而も未來は不安を感じられた

さればこそむらのない努力こそ此の時の一茶の尊い心境であつた。

瘦蛙負けるな一茶こゝにあり。

の句は彼の眞剣な氣持—彼の大成の根據—をよく表してゐる

(五)

寛永七年の暮、彼は江戸に歸つた。

深川や川向にて御慶言ふ。

やがて享和元年四月信濃の柏原に歸つた。幼時父と悲しい別をして、獨りとぼ／＼江戸に向つたと同じ路を辿る一茶の心はさんなであつたらう。父は泣いて一茶の成人を歡んだ。けれども母は形ばかりに一茶の健康を祝したのみだつた。

長の別れの後、父に逢つた喜びも束の間、一茶の父は病床につき、彼の悲歎の中に寂びしく此の世を去つて行つた。

急に迫り來る繼母の魔手は、彼に安全なる土地も與へず、一茶は

故郷やよるもさわるも茨の花。

と詠じて立去つたのである。しかし其の後、親ゆづりの家に春を迎へられる事になつて

ふしぎ／＼生れた家で今朝の春。

と隨喜の涙に感動した其の儘を詠じてゐる。

(六)

俳諧寺一茶が失くなつたのは丁度文政十年の或る淋しい晩秋







生徒ニヨツテ正七角形、正九角形、正十一角形等ノ一邊トシ  
テノ近似線分ガ發見セラレタ、此ノ横田ノ工夫セル内接正七  
角形ノ作圖ハソノ中ノ一ツデアアル。在來ノ直径ヲ七等分スル  
方法ヨリモ簡便デアアル。

二、圖ニ於テ角ABCノ値ヲ〇トスレバ

$$\sin \frac{\theta}{2} = \frac{\sqrt{3}}{2}$$

$$\text{故ニ } \theta = 120^\circ \quad 17.2^\circ$$

圓周ノ七分ノ一ノ弧ニ對スル中心角ノ値ヲ $\theta$ トスレバ

$$\theta = 51^\circ \quad 25.7'$$

$\theta$ ト $\theta$ トノ差ハ八・五分ニ過ギズ

今 $\theta$ ノ精度ヲ $\epsilon$ トスレバ

$$\epsilon = \frac{\theta - \theta'}{2} = 0.0275$$

(原 田)



### 川崎先生のお言葉

私は今でも随分と姿勢が悪いが中學生時代には級中でも特に悪かつた。その私が軍人志願をしたのだから第一教練の先生が笑はれた。しかし志を立て目標を定めて之に向つ

て一意邁進をはじめた私が、挫折してはいけないと思つてそれから先生の注意により、それは一生懸命に朝夕徒手體操を勵行したものだ。この事は私の心身の上によい結果を與へること、なつた、私の友達で秀才で病魔を斃れた者も非常に多い中で私は健康を保全してゐる、そして素志も叶つた。堅忍持久の精神、適度の運動を勵行することこの二點を現代の中學生に特に望む。



### 杉原先生のお言葉

私も生來餘り丈夫でなく、小學校時代は弱蟲であつた。中學校時代に柔道をやつて今井といふデツカイ先生に片足を押へられて何うしても起きれなかつた事を今でも覚えてゐる、それから大いに柔道に勵み盛んに駈足をやり、又絶えず懸垂をやつた、お蔭で三年生頃から體がメキメキと丈夫になつた様に思ふ。學校の稽古では物足らず、町の道場へも通つた。何といつても體がもとだ、中學生時代には何等かの方法に依つて身體の鍛鍊を圖られたと思ふ。



### 文苑

#### 昭和の光に浴して

五年 石原六郎

皇太子殿下の御誕辰第三年を迎へて天津日嗣の皇子の彌御健勝を拜し奉つては私の心は昭和の光が一段と増し輝き來るかの明るさになります。悠久三千年の光輝ある歴史は今や廣大無邊に輝く昭和聖代の瑞光となつて、燦然として世界の日本として四海の涯に擴がつて行くのであります。此の尊い瑞光に浴しては祖國彌榮の如實の深き感激を身に覺えます。この大日本帝國の繁榮の無窮。またその斯の如く赫々たる國威を發揚して、今日にある所以はそも何に依るのでありませうか。これ實に皇統連綿として宇内に比類無き我が皇室の御稜威であり、建國創業の古より育み培はれた盡忠報國の國民的精神に與るものであります。彼の建武の中興に於ける楠公父子の誠忠も、幕末維新の大業に殉じた幾多の愛國の志士の燃

ゆるが如き大和魂として、忠の一字の精神魂が聳勃たる日本精神として時に觸れて發露した所謂國體の精華であつたのであります。よし組織や制度は時勢と共に變遷し推移するとしてもこの精神こそは、永遠に國民至上の道徳として古今を貫いてゐるのであります。然るに近代に入り我が國民の一分子には國體を異にせる他國の思想に眩惑し雷同して、この美はしき國體、優秀なる國民性の認識を缺き、剩へ光輝ある帝國の歴史を汚毒せんとする者が二三あつたのであります。然るに昭和に入り突如として彼の暴虐なる支那官兵の企てたる滿鐵破壊の一彈は、これらの誤つた思想を一洗し我に於て正に強力なる日本精神覺醒を促す警鐘となつたのであります。而して永遠なる東洋の平和の使命に甦り祖國生命線擁護の爲に驟然起つたのであります。そのためには國際間に於て所謂光榮の孤立に立ち、國歩重大なる時局を招き、非常時の名に於て思想の混沌を排し、經濟の克難を敢てして、以て祖國の存在と實力とを固め來つたのであります。今や日本は世界の日本



として否日本の世界として立つてゐるのである。

見よロスアンゼルス、オリーブスタジアムの橋頭高く  
榮譽ある日章旗を翻したのも、亦全世界の人々に向つて太  
和魂の精髓を遺憾なく痛感せしめ、世界に日本の向ふべきと  
ころを知らしめた一種言ひ知れぬ感激であります。今日この  
非常時に際し我等青年の意氣と勢力とは更に今後に於て百難  
を克服することによつて日本の世界を現出せしめることを確  
信してゐるのであります。昭和精神とはこれでありました。畏  
くも 今上陛下に於かせられましては、曩に『國運進展ノ基  
礎ハ青年ノ修養ニ俟ツコト多シ』と宣はせられたのでありま  
す。昭和維新の大業を輔翼し奉つて、彌榮に國運の隆盛をも  
たらすこと、そのことが實に我等青年の大使命となつてゐる  
のであります。雄大にして鞏固なこの愛國的思想と鼓々して  
息まざる眞日本の文化とは國家興隆の不撓の魂であり、我等  
皇國青年の誇りであり、大使命を遂行すべきこの偉大なる皇  
國青年の天與の賜であります。この萬斛の熱情を以て、我等  
は各自の天職をして單に自己の手段とせず、これ直に國家機  
構の重要な一要素なりとの自覺の下に、渾身の努力を捧げ  
日夕に肉体の練磨、精神の陶冶を圖つて之を今後に貫くなら  
ば、一九三七年と一九三八年と現下の非常時の前途に瑞氣ば  
霽々として更に漲渡るのであります。われら青年のこの精神  
この意力こそ、躍進日本の誇るべき原動力となり、昭和の光

となり昭和日本の榮冠として永久に世界を光被するものだと  
信するのであります。

## 彦中精神

五年 望月 實

金亀の城は夕日に輝いてその雄姿を太湖に長く横たへてゐる。

三百年の昔から今に鳴り響く鐘樓の時告ぐる鐘よ、春は百  
花亂れ咲く歡喜の聲とき、夏は青葉若落の梢吹く風に運ば  
れ、秋は思ひに沈む一ときの心に通ひ、冬は雪の夜の夢とけ  
うとくわが胸に響く。

あゝこの四時の鐘の音に護られて城下の聖地に巍然として  
聳ゆるわれらが校舎、わが校の歴史、我が校の傳統に秘めら  
れた精神は何か。

今、耳に近きこの鐘の音を聞きつゝ、我は彦中精神を思ひ、  
彦中精神を求めて心は靜かに大空にひろがり、夕映の紅い雲  
に走つて行く。

誇り

『諸君が彦根中學校の生徒として最も誇りとすべき事柄は何  
か。』これはある日の査閱官の質問である。

『第一に本校は畏くも 大正天皇が大演習の砌大本營に御治定

遊ばされたこのことを無上の誇として居ます。』

査閱官の顔にはほのかに満足の色が表はれる。

この事は本校生徒として一日も忘れてはならない事柄であ  
る。彦中七百の健兒の誇りは、恐れ多くも陛下の御玉歩の御  
跡にその日々を學び得ることである。

我等はこの無上の光榮を悦ぶと共に、この誇りを中外に表  
はすべく一層奮勵努力して、陛下の赤子として盡忠奉公の精  
神に燃えつつある。

校訓

『本校生徒ハ聖旨ヲ奉體シ 敬神崇祖 實實剛健 勤勉力行  
和衷一心 以テ至誠奉公ノ國士タルヘシ』

校訓を靜かに心の中で誦するとき、我等の使命の何である  
かを知ることが出来る。そして之に到達する道の一つ一つを  
明らかに心にうなづく。

この校訓こそ、我等が天下の一中生として、その實踐に於  
て他日我等の面目を我が校の名譽を發揚するものでなくては  
ならぬ。

私はこの簡にして深い意義と、強くして高い志とを毎朝に  
思ふ。毎夕に思ふ。

敬神崇祖

『招魂社の前を通るときは必ず最敬禮をせよ。』と僕は小學  
校の時代から父に言ひつけられてゐた。

始めは誰もしないのに自分だけがするのはおかしいと言ふ  
様な氣のした頃もあつた僕だったが——一度招魂社の前に額  
づけば僕の心は澄然として、身を忘れ、親を忘れて滿洲の野  
に戦はれた皇軍の尊い姿として映る。

日清、日露の戦役に、陛下の御爲に、祖國の爲に、名譽の  
戦死な遂げられた人々の英靈が、非常時の現實の日本の生命  
線を守つて滿洲の土となられた尊い犠牲の魂が。眼前に髣髴  
とする。日本人として……苟しくも日本人の血を有するも  
のとしてこの前を通るとき自ら頭の下るのが當然ではあるま  
いか。ましてわれら彦中の生徒——かくてやがては我も護國  
の鬼とならんかとの決心を固めるばかりである。

實實剛健、時正に非常時超非常時。青年の最も心がくべき  
ことは、剛健なる身体、強壯なる精神である。

近來日本の青年の体格の弱くなりつゝある事實は各方面に  
於て憂へられてゐる。

文武兩道の日本古來の精神を以て、學校生徒のその名に於  
て我々は學ぶことを第一とすると共に心身の實實剛健をも又  
修養の第一とせなければならぬ。

前途の日本の重大なるわれらの使命を思ふ時には特に。  
見よ。彦中の運動部選手は漫りなる競争射撃の意志に立つて  
はるない。皆この氣風を以て立つてゐるのである。その意氣  
に即する眞面目な、しかも堅固な實力は、その意氣は即ち彦



中運動部の現在及び將來を物語つてゐる。

かくして練れた身体と剛健實實の精神とは一死奉公の源泉となる。そして將來の人生の戦にも不斷の燃料を供給する。日本を背負へりと自任するか故に運動は、鍛錬は我等の任務となる。

#### 勤勉力行

天才とは努力の別名である。

如何に天才たりと雖も、怠らば驚馬に先んじられるのである。彦中生必ずしも全部が天才ではない。が、努力こそは我等の本義である。よし驚馬としてその歩みはおそくとも、之に鞭打ち、之に鞭打つてごこまでも前進するのだ。

一日を怠るな。その一日の怠りを我等彦中生の恥と知れ。たゞ大いに勵め、大いに學べ。我等の將來、われらの希望の達成と否とは、今日の勤勉の如何に關する。

突進だ、進軍だ、奮迅だ、勝利の彼岸に至るまで。

#### 和衷一心

『上下心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハコレ我が國體ノ精華ニシテ……』

と勅語にもお諭し下さる如く、和衷一心こそ日本の美点である。團結の力。和衷の姿、上級生は下級生をいたはり、下級生は上級生を尊敬するの美風がわが校の歴史の姿である。弟に過失あれば直ちにこれを正せ。兄に過失あれば直ちに之を

全く意氣から生れる。かくてわれらは、やる、やる。必ずやる。やるべからざることは又斷じてやらない。

われらは『決してやらない。』

青年としてわれに姑息はない。正々堂々と何事にも意氣を以て當る。

#### 結 び

我等は天下の一中生である。

我等の守るべき道は校訓にある。われらは日本の彦根中學として彦中精神をそのまゝ、日本精神と知つてゐる。

彦中精神の發揚は日本精神の發露である。

我等は彦中生徒なり。故にわれらは彦中精神に基づいて生きる。

至誠奉公の國士は我等の魂である。

## 西郷南洲論

五年 菅原道忠

西郷南洲と言ふと私は直感的に偉大と言ふことに聯想させられる。そして何となく懐しい感じと崇拜の感じとの入交つた情が湧き起つて来る。立派な偉い私さのおぢさんの様にさへ思へてならない。翁は實に近世日本の産み出した大英雄

正せ。心からなる忠告こそ正道は歩ませる手段である。虚心にしてその誠を盡せ。模範を示せ立派な兄。愛敬を失ふな立派な弟、親しき兄弟の團欒。睦まじく相たすけ合ふ和衷一心敬禮は形式ではあるが心に全校兄弟の愛情が満ちてゐる。

#### 自 由

蝶が空を飛ぶ。それは眞實に於て自由であらうか。蝶はたゞ自分の本能によつて行動してゐるだけである。

花にたはむれた蝶が雨のために地上に叩き落されて命を失ふのも自分の本能の力のみしか有しないからであらう。

眞の自由、それは何處に在るか。自律と秩序のない所に眞の自由はない。

我等の周りには勿論校規が儼然として取り巻いてゐる。

それがあつて自由が存在してゐる。そこに眞の自由があるのである。規則を守り得て而してわれらは自由である。

校則に守られて學園は到るところ美はしく、堅固な自由の花園となる。

#### 意 氣

青年の特權は何か。意氣である。意氣こそ我等若人の唯一の武器である。われらは何ものよりも意氣に乏しいと言はれることの恥辱と思ふ。

青年よ意氣に生きよ。元氣は我等の生命である。

自己の信ずる道を進むのも、あらゆる誘惑に打克つ信念も

である。

翁の一代の勳功の中では何といつても先づ第一番には維新の回天の偉業を翼賛した事を挙げねばなるまい。

維新の大業を畫策したのは又岩倉・大久保の兩公でもあつた。が其の偉業を刃に血ぬらざる武力的解決といふか平和的折衝とも言ふかの手段を以て決行し、成功せしめたのは實に西郷南洲翁であつた。

第二に擧げるべき翁の偉勳は廢藩置縣の大英斷であらう。

その當時中央政府の實力で以て強大な諸藩を廢止の事は容易ならぬ難事であつたらう。而も翁は大覺悟を以てこの難局に當り見事に之をやつてのけたのであつた。

翁は非常に豪放であつた。しかも決して武斷のみの人では無かつた。翁は實行の人であつた、翁の一言は鐵よりも堅く翁の一言諾は石よりも堅かつた。又翁は學問を非常に好んだ。そして私學校を興し自らはその長となつて多くの門弟達を……した。

翁は大義名分をよく知り且つ之を重んじた。だから決して皇室に弓を引くが如き心は無かつたであらう。然し彼の明治十年の西南の役に於ける翁の行爲が何故にあの様であつたのか。勿論翁にとつては當時の政府に對して尋問すべき点は多くあつたかも知れない。然し翁の心のみでは決してあの様な行動に出てなかつたと思ふ。翁はその部下に擁せられたので